

京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第5号

目次

私が入学したころの西洋史

廣實 源太郎2

明治大学史資料センター設置の

経緯・現状および課題

鈴木 秀幸4

データで見る京都大学の歴史：

京都帝国大学の歳入8

日誌10

大学文書館の動き：

展示「京都大学の歴史」を

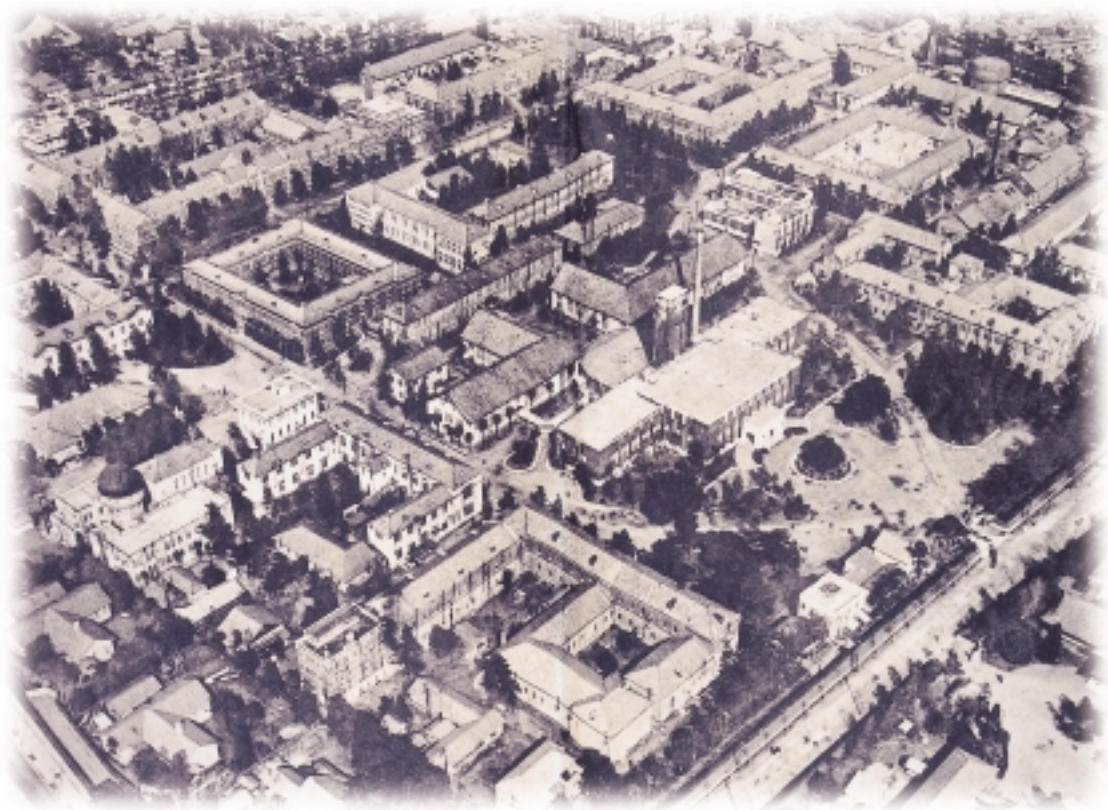
開催します11

資料提供のお願い11

京都大学と「開かれた大学」

—「夏期講演会」について—

嘉戸 一将12



本部構内航空写真(1930(昭和5)年ごろ)

本部構内を南西から北東方向を見る形で撮影している。撮影年代は建物の配置から1930年ごろと推定され、現在大学文書館で所蔵している航空写真では最も古いものである。時計台や石油化学教室本館(現在学生部等が入っている建物)、文学部陳列館、土木工学教室本館などはすでに建てられているが、他の多くの建物は現存していない。当時はほとんどの建物が2階建てまでであり、時計台は今よりもずっと目を引く高さであったに違いない。

私が入学したころの西洋史

大阪外国語大学名誉教授(1947(昭和22)年文学部卒) 廣實 源太郎
流通科学大学名誉教授

昭和17(1942)年9月、逼迫した情勢のなかで、旧制高校の課程を二年半に短縮されて卒業した私は、その年の10月、京大文学部史学科に入学し、一年後、西洋史学を専攻することになった。西洋史を選んだのは、さまざまな外国語(といっても、頭にあった外国語とは、高等学校の教科にあった英・独・仏ぐらいであったが)を駆使して、外国語の文献を自在に読んでみたいという、ついに一生到達できなかった願望を夢みてのことであったように思う。

入学動機のもう一つを、今になって、思いかえしてみると、高校生が愛読していて、従って私も愛読した教養書の著者に、また『中央公論』や『改造』といった雑誌の記事や座談会で、京大西洋史の先生方に親しみを感じていたからでもある。

私が入学して、すこしは様子が分かるようになってきたころの、西洋史のスタッフは、原隨園先生が教授、鈴木成高、井上智勇の両助教授、さらに、考古学に籍をおかれていた村田数之亮先生が、西洋史との共通講義を担当されていた。中山治一先生や前川貞次郎先生は三高教授を順次、担当されながら、若い非常勤講師として、初めて、大学の教壇に立たれたころであったように思う。

原先生には、入学直後から教えをうけることになった。というのは、多分、何年かごとに交代で講ぜられていたのだらうと想像される「史学研究法」を、原先生が担当されていて、この講義は、史学科の学生には必修のものであったからである。

当時の原先生は「洋服はもっておられな

い」と学生がかげ口をするように、和装を貫かれていた。それに、かなりの長さに達するあごひげをたくわえておられ



た。つまり、遠くからでも、一目で原先生とわかるイデタチであったといつてよい。

原先生の授業ぶりは、形からいえば、和服に草履、左手で髭をもみながら、ゆっくりとした調子で、説き聞かせておられるようであった。「史学研究法」でいえば、どんな手順で研究を進めるかとか、史料をいかに区分し、活用していくか、といったことをいっておられるのではなく、もっと包括的な立場から、人間生活から、いかに歴史が切り離し難いものであるかを説いておられたのだったように思う。

それにしても、学生が不可思議に思ったことは、二時間単位の講義に、原先生がもってこられる、いわば教材に当るものが、三、四枚のカードだけということである。そのカードは、学生が英単語を覚えるために使うものに比べれば、確かに大きい、せいぜい名刺判を多少、上まわる程度のものである。「あれ一枚で三十分のネタが書いてあるのか」と、誰もが首をかしげていた。

後に、研究室に残るようになって、カードの実体をカイマみることになったが、それを知れば、さらに不思議さが増すものである。それには、例えば「Herodotus, I, 3

—12」といったことが書かれているのみである。つまり、ヘロドトスの『歴史』の第一巻の…といった出典がメモされているのみである。後に、誰かが、このスタイルをまねて、それでもカードは十枚ほどにして、授業にいったら、講義は三十分とはもたなかったという後日談も、まことしやかに伝えられた。

鈴木先生に教わったのは、不幸にして、一回生の時に、西洋史概説の「中世史」の講義を拝聴したのみで終わった。「こういうのが大学の講義というのだろう」と、解らないままに想像した。髪はグシャグシャ。ネクタイはまがり、ワイシャツのボタンには、はまってないものもある。そんなことは気にもされず、時に目をとじ、口にツバをためながら、鈴木先生の講義は進んだ。おそらく、鈴木先生の頭の中はフル廻転していたのであろう。すでに卒業されているながら、鈴木先生の授業には、教室に出てきてきいておられた兼岩さんと、授業が終って二人で研究室へ引きあげられるあとを、ついていくのでもなく、ついていって、お二人の会話が耳に入ると、「ドプシュのあの個所の…」といった、この世の会話とも思えない内容が耳に入り、「ここは大学だ」と感じた。

私は、ドイツ近代史を専攻に選んだので、中山先生に師事した。本格的に、日本に西洋史学が成立するのは、大類伸先生以後とすれば、その初期にあっては、できる限り忠実に、先進の欧米諸国の研究を吾が国に移植することであつたといつて、余り大きな誤りではなかろう。この手法は、多少、形は変えながらも、今後もつづくと考えられるが、この方法以外に、日本人が、日本の眼で西洋を読み解く歴史学があるとするれば、中山先生がその最も先端に立って開拓されたお一人であることに異論はなかろう。先生に叱られた記憶はないが、それでいて、「お前、まだ分からないか、しっかり

しろ」といつもいわれているように思われてくる。

ローマ史を専攻されていた井上先生との学問上の関係は濃くはなかったが、はじめは茨木、やがて高槻に住まわれていた井上先生とは、私が大阪に住んでいた関係で、大学からの帰路は、多くの場合、お供をし、途中でコーヒなどを飲ませていただいた。私を"特別研究生"に推していただいたのも、井上先生であつたらしい。「だから」というわけではないが、今年に一度、先生のご遺宅に、数人でお邪魔して、先生のご位牌に頭を下げている。

考古学にポストをもたれ、後に阪大の西洋史を創設された村田先生や新制大学の発足とともに、広島大学から移って、教養部に入られた中原与茂九郎先生など、言いだせば、つきることのない思い出がつづいている。今なお、お元気な先生方もおられる。私の年齢が81歳であることから推して、そうした先生方が、いかにご長命であるかを察し、秘かに喜ぶものである。

明治大学史資料センター設置の経緯・現状および課題

明治大学史資料センター事務長・文学部講師 鈴木 秀幸

はじめに

2003(平成15)年4月1日、明治大学に大学資料館がオープンした。名称は「明治大学史資料センター」(以下「センター」という。そして翌月26日には駿河台校舎リパティタワー 23階のホールにおいて開設を記念する式典や講演会等が催された。(後掲写真)

この開館にたどりつくまでは、必ずしも事が順調に運んだわけではなかった。むしろ苦難の歴史であったといった方がよい。また、発足してまもない現在でも問題や課題が全く無いわけではなく、むしろ多々あるといった方がよい。だが、それよりも気概と夢が優っているというのが実情である。

こうした経緯、現状、あるいは課題は何もひとつ大学の問題だけではないため、あえてここに明治大学の大学資料館の実態を披瀝し、大方の参考にしていただくとともに、ご指導をも願いたいと思ったのである。

資料館設置の運動

はじまり

現在、明治大学において資料館開設に関する最始の資料を確認できるのは、1981(昭和56)年7月28日のものである。その資料とは「大学史資料館」(仮称)設置について(お願い)」という歴史編纂委員会委員長より理事長に宛てた文書である。このことをもって、明治大学の資料館建設運動のはじまりとしてよい。さらに1985(昭和60)年5月31日、同委員会は委員長名で事務組織改善委員会座長に「歴史編纂資料室の組織上の位置づけ及び大学史資料館・大学史資料館事務室への移行について(お願い)」を提出し

た。

しかし、これらは実現しなかった。そうではあったが、明治大学における大学資料館建設に向けて先鞭を



付けたことは確かであるとともに、広報課内の一担当であった歴史編纂資料室が総務部内に歴史編纂事務室という一課として置かれるようになったことは大きな成果であった。こうした先人の労苦を忘れることは出来ない。

理想と現実

前記した歴史編纂専門委員会(のちの百年史編纂委員会)と歴史編纂事務室の主務は『明治大学百年史』刊行が目的であった。その完結が迫った1994(平成6)年4月7日、同百年史編纂委員長は理事長に宛て「大学史資料館」(仮称)設置について(お願い)」という要望書を提出した。これも実現しなかった。

だが、その年の10月20日に総長に宛てた「大学史料保存・利用小委員会」(仮称)設置のお願い」は実現した。従来と比べて規模は縮小したとはいえ、1995(平成7)年4月から大学史に関するセクションは存続することとなった。命はつながったのである。このことは、百年史編纂を首尾よく終えたことが学内で評価されたためと、百年史編纂をしながらも雁行的に次の段階を提案していたための結果と確信した。

いずれにしても、こうして成った大学史料委員会および新歴史編纂事務室の目標は明快であった。大学資料館の開設である。本誌のスペースの関係上、この間の設置要望の内訳をいちいち列記することは出来ないが、いずれにしても事あるごとに機会を見付けて学内各部署に大学資料館に関する書類を提出した。当然のように定期刊行物の大学史紀要や歴史編纂事務室報告集、あるいは学内紙でも設置に関する記事を掲載した。これら学内誌(紙)には百年史編纂時代のOBの方々も資料館設置の急務を訴えてくれた。だが、百年史編纂無事終了という安堵感、組織のスリム化、他の学内施設設備拡充優先等々、さまざまな問題が横たわり、いわば総論賛成、各論要検討の状態が続いた。

資料館の実現

危機と絶望

正直なところ、この時期、「次は百五十年史だね。まあ、それまではいいね」という声をかけられると不安になりながらも、「あれだけの百年史編纂をしっかりとやりとげたのだからがんばりなさい」という励ましを受けると勇気を得た。また時には、ある大学史関係者から「涙ぐましい」とまで同情されることもあった。

そして、最大の危機が訪れたのは、2000(平成12)年9月の「事務機構改善案」が学内のあるセクションより報知された時であった。そこには、次年度より歴史編纂事務室廃止、博物館への業務移管と文面のトップにゴチックで強調されていた。もっとも、このことは全く理由のないことではなく、実はその前から、大学史料委員会・歴史編纂事務室は建設予定の新校舎に大学資料館という一館としての場所を要望し、既にそこに移設が決定している博物館と協議をしていたからである。しかし、前記改善案の予定は一館ではなく、一担当に近いもので

あった。

この間、さまざまなことが目まぐるしく展開、事がひとつ起るごとに、関係者の心臓は高鳴った。結局、同室は1年間現状のままとされた。その理由は、進行中の創立百二十周年記念事業に同委員会・同室が多方面に、深く関わっていたからである。それに加えて委員長をはじめとする委員、総務部長以下の室員が資料館の新設に向けて一丸となって奔走したためであった。今にして思えば日に日に、活字文書・着席中心から口説・行動・室外中心へと活動が顕著に変化していったのである。また、学内外関係者から応援・協力の声を肌で強く感じるようになってきた。

実現

2002年度、すでに大学史のギヤは前進のシフトしかなかった。少なくとも学内大学史関係者にとっては停止や後退は全く考えられなかった。この機会に大学資料館が開設されなければあと50年(創立百五十周年史時)はないだろうという危機感により理事会説明、各部署への説明、関係者懇談会等々に当った。また規程の条文作成も先行的に進めた。条文制定には、事務局に文書作成と手続きに精通した者がいたことも幸いした。われわれは条文とは単なる語句の羅列ではなく、それまでのさまざまの経緯、実情、さらに課題を念頭に作成されるものであることを学んだ。例えば、名称をどのようにするのか、業務の内容は何か、メンバーの構成はどうするのか等々、1条定めるにも相当の時間を要した。

そして、ついに2002年11月18日の理事会において「明治大学史資料センター規程」の制定が可決された。また2003年2月4日大学教職員組合とも事務組織に関する覚書が交換された。明治大学の大学資料館が学内行政の上で明確に機関として位置付けられ、念願の看板を掲げることができたので

ある。なお、これらの詳細については、今後、別稿で詳細に綴るつもりである。

現状と課題

目標と性格

センターの目的は規程には、第2条に「センターは、本法人の歴史(以下「校史」という。)に関する調査、研究並びに校史に係る資料(以下「資料」という。)の収集、保存及び公開を行い、もって本学の発展に資することを目的とする。」とされている。

その目的は第3条に「校史の調査及び研究」以下9項目が掲げられている。また規程には盛り込まれていないが、所員全員、センターの目標や役割を次のような題名で内部文書に表現している。

- ・大学の「顔」としての存在
- ・帰属意識の場
- ・情報のサービス
- ・伝統の維持・発展
- ・大学史の開拓・構築

この解説文は最後に資料として掲げがあるので、参照されたい。いずれにしても、以上の目的や役割に基づき、当センターの事業分野としては、編纂、展示、サービス(情報公開をも含める)を柱とした。またそのための業務内容としては「創作者」・「校友」・「地域」に関する事柄を中心とすることにより、とりわけ私立大学としての特質を考慮しつつ展開していく方向である。このことは場合によっては学内行政文書を中心とする大学アーカイブズとは若干、性格が異なることがあるかもしれない。あるいは同じ方向性であったとしても事業や業務の力点の置き方が当面異なるかもしれない。そのことは当センターの場合、開設までの過去の経緯に既定されているためと思われる。すなわち、前身は年史の編集機関であるため、調査研究およびそれによる刊行物の出版にはかなり力を入れている。目下、2つあるプロジェクト・チームもそのこと

を目ざしている。また、これまで大学史展は百年史編纂の終了前から大規模なものから小規模なものまで、多種多様な展覧会を開催してきた。その実績を2004年3月オープン予定の新校舎大学史展示場に充分に生かせるようにしたいと思っている。

むろん学内行政文書に対し軽視しているわけではないのだが、そうした公文書の公開はサービス業務の中のひとつとして捉えている。

課題

とはいえ、問題点は多々ある。施設の面でいえば、事務室と資料収蔵室と展示場が別々の校舎に存することである。このことが管理や機能の面に大きく影響している。とくに資料の収蔵においては、スペースや保存環境の面で苦慮している点が少なくない。今後ますます収蔵資料が増加することは明らかであり、また紙文書以外、例えば実験器具、農具等、モノ資料の受入も積極的に行なわねばならないことを想定すると容易なことではない。

これら資料をもとに前記した情報公開、問い合わせへの対応等々サービス業務、あるいは展示や講義講習などの教育普及事業も拡充しなければならない。一方、人員に関しても不十分である。現在、運営委員9名、事務局3名(2004年度より4名；専任)の体制であるが、今後さらに検討をしなければならない。

まとめに代えて

最後にごく簡単に明治大学史資料センター実現の要因をまとめると、次のようなことがあげられる。

- ①先人の労苦に満ちた運動により成ったこと。
- ②百年史編纂、その後の展覧会等、一定の実績を学内外の方々が評価し、さらには支援して下さるようになったこと。

③学内大学史関係者が、「理屈から行動へ」、「文書だけでなく折衝へ」、「室内から室外へ」という意識を今まで以上に強く持つようになったこと。

とにもかくにも、こうしたことにより明治大学の大学資料館を「得た」（与えられたというより）のである。ただし、行政的に位置付けられ、ハード面も拡充方向とはいえ、やはりそれだけでは発展せず、やはりセンター内の活動内容しだいである。日々の業務を確実に遂行することはいうまでもなく、斬新な構想と方法を常に求めているかね

ばならない。衰滅の速度の方は実に速いと思われるからである。



明治大学史資料センター開設記念式典
(2003年5月26日、記念講演をする井上ひさし氏)

資料1 明治大学史資料センター開設関係年表

1962年(昭和37) 6月	広報課歴史編纂資料室設置
1977年(同 52) 6月	歴史編纂委員会設置(100周年記念事業)
1985年(同 60) 9月	百年史編纂委員会設置
1986年(同 61) 3月	『明治大学百年史』第1巻刊行(1994年、第4巻にて完結)
4月	総務部歴史編纂事務室設置
1993年(平成5)10月	百年史刊行記念「明治大学の歴史展」開催
1995年(同 7) 4月	大学史料委員会設置
5月	東日本大学史連絡協議会々長校就任(のちの全国大学史資料協議会の会長校、2002年就任)
11月	さよなら記念館「明治大学記念館歴史展」開催
1998年(同 10)11月	リパティタワー竣工記念「明治大学歴史展」開催
1999年(同 11) 2月	駿河台校舎「明治大学小史展」第1回開催
2000年(同 12) 5月	和泉地区「明治大学和泉小史展」第1回開催
2001年(同 13)11月	創立120周年・創立者生誕150年記念「建学の精神とその歴史展」開催
2003年(同 15) 4月	明治大学史資料センター・同事務室開設
2004年(同 16) 3月	明治大学史資料センター展示場開設予定

資料2 明治大学史資料センターの目標・役割

1 大学の「顔」としての存在

本学の法人部門、教学部門の校史に関する資料の収集・保存・管理の全てを担う。そのことをもとに、本学の情報発信のひとつとなることを目指す。

2 帰属意識の場

多くの本学の卒業生・学生・保護者・役員教職員等の関係者にとって、明治大学を強く意識する、具体的な場所あるいは拠り所となるように務める。

3 情報のサービス

問い合わせへの応対、展示や出版等によるサービス業務はいうまでもない。さらに公的機関では義務付けられた、いわゆる情報公開に向けて準備をしている。

4 伝統の維持・発展

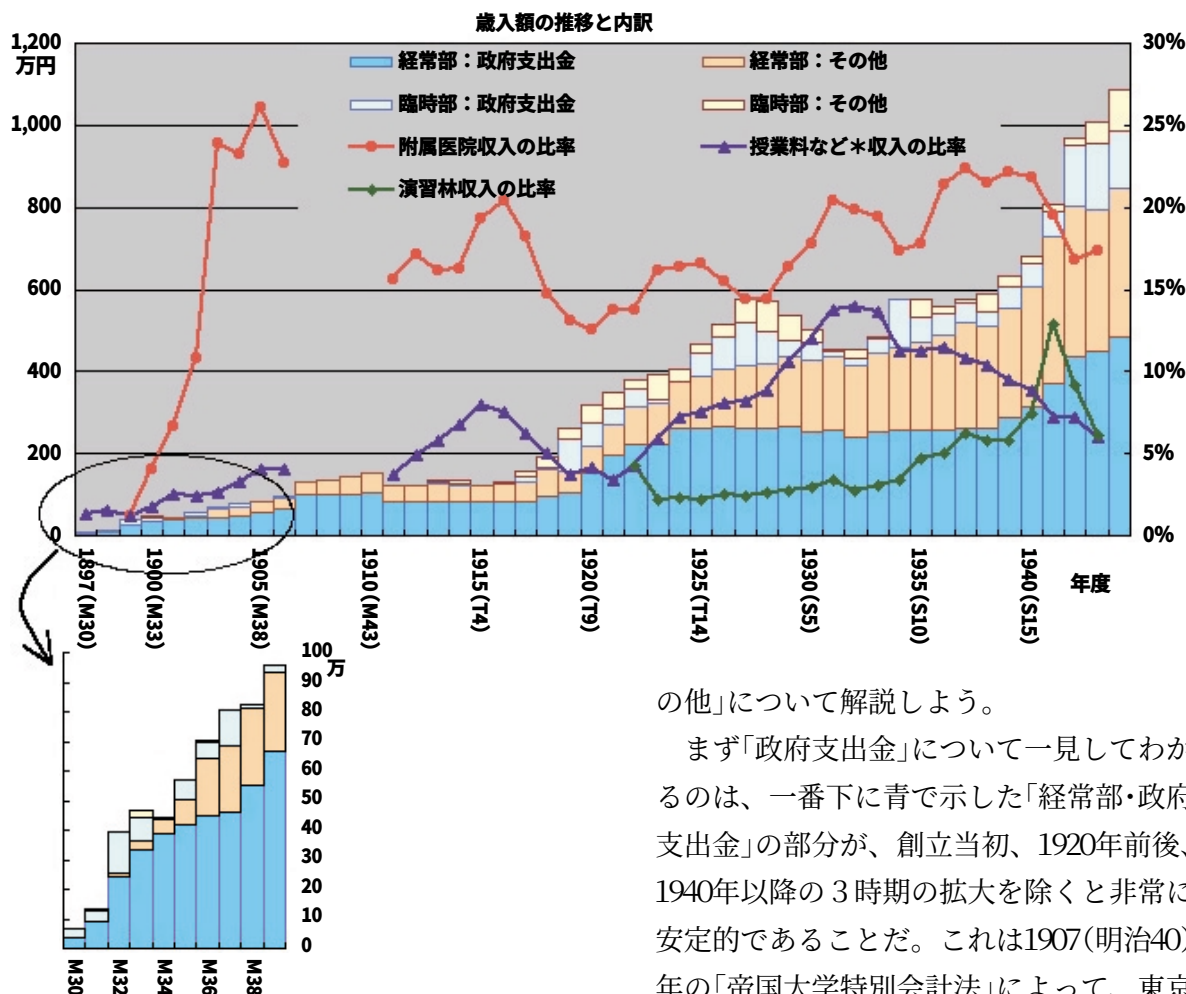
創立以来、先人が営み、かつ残してきたものを保存する。さらに精力的な調査と客観的な研究により、将来のために生かしていかなければならない。

5 大学史の開拓・構築

日本における「大学史」の分野は、まだまだ日が浅い。しかし近年、急速に注目され、社会的な認知を得た。当センターは積極的に他大学や類縁機関と連携や交流をし、このことに寄与したい。

データで見る京都大学の歴史

京都帝国大学の歳入



京都帝国大学時代における歳入の内訳はどのようなものであったのだろうか。『歳入歳出決定決算書』に掲載されている毎年の経費のうち、今回は「歳入」について扱うこととする。

歳入の費目は年度によっても異なるが、帝国大学時代においては、「経常部」と「臨時部」に大別されており、双方に「政府支出金」もその他の項目も含まれる。ここでは、「経常部」の「政府支出金」と「その他(＝「合計－政府支出金」以下同じ)」と「臨時部」の「政府支出金」と「その他」の4つにまとめ、積み上げ棒グラフ(左軸目盛)に示した。『歳入歳出決定決算書』の記載とは順序が異なるが、ここでは、「経常部」と「臨時部」の「政府支出金」について先に解説し、続いて両部の「そ

の他」について解説しよう。

まず「政府支出金」について一見してわかるのは、一番下に青で示した「経常部・政府支出金」の部分が、創立当初、1920年前後、1940年以降の3時期の拡大を除くと非常に安定的であることだ。これは1907(明治40)年の「帝国大学特別会計法」によって、東京帝国大学には130万円、京都帝国大学には100万円の定額政府支出金、特別会計に繰り入れられることに定められたためである。

福岡医科大学の分離(1911年)や行政整理による減額、また1920年前後には物価騰貴、教職員の増給などによる頻繁な増額があったが、その都度「帝国大学特別会計法」は改正されている。

なおこの制度が適用されたのは、東京帝大と京都帝大のみであり、後発の東北帝大や九州帝大では、当初から講座を基準とした予算配分が行われてきた。官立大学の増加に伴って「帝国大学特別会計法」が「大学特別会計法」に改められたのは、1921(大正10)年であるが、その後も1925(大正14)年の

「大学特別会計法」一部改正によって廃止されるまで、東京、京都の両帝大においてはこの定額支出金の制度が続けられた。

廃止以降は、京都帝国大学においても他の官立大学と同じ大学特別会計法の枠組みのなかで、講座研究費としてほぼ一定の額が支出されるようになった。その後、戦時体制下における講座の増加などに伴って増額されるまで、毎年ほぼ安定した額となっている。

このほかに一時的に政府支出金を増やす必要が生じた場合には、「臨時政府支出費」（「臨時部：政府支出金」水色の部分）として一般会計からの繰入が行われる場合が多かった。これは主に施設などの整備に当てられた。創立当初における「図書機械及標本費受入金」として、また1912(大正元)年の理工科大学本館焼失に伴う「災害費補足受入金」として、さらに大学の規模が拡大した1919～1920(大正8～9)年には「工学部及理学部拡張費」「大正三年臨時事件費」¹などの名目で繰り入れられている。1921(大正10)年以降においても臨時政府支出金は毎年繰り入れられているが、その内訳はあまり示されなくなり、施設設備の新営や修繕に充てられているようである。

次に、両区分の「その他」について見よう。ここに含まれる費目やその区分については年によってかなり異なるが、「経常部 その他」（オレンジ色）の中心は「授業料収入」や「医院収入」、「演習林収入」など大学独自の収入であり1939年以降は「受託研究費」もここに含まれる。「臨時部：その他」には「用途指定寄付金」や「維持資金受入」が含まれる。

「授業料収入など（「検定料収入」、「入学料収入」を含む）」「医院収入（1903～1906年は「福岡医科大学医院収入」を含む、1911～1920年は「患者収入」）」、「演習林収入」（臨時部の「演習林臨時収入」を含む）の全体に占める比率を折れ線グラフ（右軸目盛）に示

した。病院や演習林が、大学の財政基盤としても非常に重要なものであることがわかるだろう。特に戦時期には、植民地の演習林からの収入が多い。

帝国大学時代の会計制度は非常に複雑であり、この制度と大学自治との関係などに対する評価も一様ではない。しかも帝国大学の経理にかかわる行政文書に接する機会が限定されていたこともあって、研究の蓄積自体が少ない分野である。だが、京都大学大学文書館においては、来春より行政文書の閲覧業務を開始し、明治期からの『予算書類』『歳入歳出決定決算書』などの閲覧も可能になる予定である。これにより、帝国大学の会計に関する研究がより行いやすくなり、理解が深まることを期待したい。

（京都大学大学文書館助手 保田その）

1 これに関して『歳入歳出決定決算書 自大正二 至 同十五昭和元』においては「大正三年事件費受入ハ時局ニ基因シ官吏以下ニ給與スヘキ臨時手当並物価騰貴ノ為物件費補足ノ経費ニ充ツル為大正三年臨時事件予備費ヨリ支出ノ金額ヲ収入セシ」と説明されている。

〔日誌〕 (2003年4月～9月)

- | | |
|--|---|
| <p>2003／4／21 東京経済大学より、大学文書館設置の経緯・現状について照会のため来館。</p> <p>4／28 大学文書館教官会議。</p> <p>4／30 『京都大学大学文書館だより』第4号、発行。</p> <p>5／2 「三高展」において企画展「三高の『危機』」開催(於三高会館、～7月27日)。</p> <p>5／19 国立公文書館より、大学文書館の現状・設備について照会のため来館。</p> <p>5／23 筑波大学30年史編集室より、京都大学百年史編集について照会。</p> <p>6／2 大学文書館教官会議。</p> <p>6／9 医療技術短期大学部庶務掛より、薬学部の前身医学部薬学科の規程について照会。</p> <p>6／12 北海道大学より、大学文書館の設置の経緯・現状・設備について照会のため来館。</p> <p>6／13 朝日新聞社より、「回生」という学年表記について照会(6月27日夕刊に掲載)。</p> <p>6／17 濱口博章氏より、文学部国文学教室関係資料等寄贈。</p> <p>6／24 松尾尊允名誉教授より、戦後学生運動関係資料等寄贈。</p> <p>6／26 西山助教授、戦時期の京大について聞き取り調査のため出張(於神戸市)。</p> <p>7／1 山中啓氏より、農学部農芸化学科同窓会関係資料寄贈。
教官より、帝国大学時代の剣道部について照会。</p> <p>7／7 大学文書館教官会議。</p> <p>7／10 西山、戦時期の京大について聞き取り調査のため出張(於神戸市)。</p> <p>7／18 立命館大学より、大学文書館の現状・</p> | <p>設備について照会のため来館。</p> <p>8／1 大学文書館教官会議。
「三高展」において企画展「戦争と三高」開催(於三高会館、～11月2日)。</p> <p>8／5 西山、戦時期の京大について聞き取り調査(於大学文書館)。</p> <p>8／8 名古屋大学より、大学文書館の設置の経緯・現状・設備について照会のため来館。</p> <p>8／11 オープンキャンパス2003開催。京都大学の歴史をパネルで展示。</p> <p>8／13 朝日新聞社より滝川事件について照会(8月26日朝刊に掲載)。</p> <p>8／29 大学文書館教官会議。</p> <p>9／2 高橋正立名誉教授より、1950年代から1960年代の学生運動関係資料寄贈。</p> <p>9／4 工学研究科より、福井謙一名誉教授関係資料寄贈。</p> <p>9／5 保田助手、全学シンポジウム「京都大学における教育の"ミニマムリクワイアメント"をどう考えるか」(於兵庫県立淡路夢舞台国際会議場)に参加(～6日)。</p> <p>9／19 拓殖大学創立百年史編集室より、京都大学百年史編集について照会のため来館。</p> <p>9／25 大学文書館教官会議。</p> <p>9／30 西山、平成15年度公文書館専門職員養成課程において「公文書館各論②——大学におけるアーカイヴズ」と題して講義(於国立公文書館)。</p> |
|--|---|

大学文書館の動き

展示「京都大学の歴史」を開催します

現在、大学文書館では展示「京都大学の歴史」の準備を行っています。この展示は、2003(平成15)年12月完成予定の時計台記念館 1 階の展示スペースにおいて常設展として行われるものです。創立期から近年までの京都大学の歴史を、学内はもちろん、京都大学を訪れる方々にご紹介することを目的としています。写真や文書資料、当時を偲ばせる現物資料などで、創立期、帝国大学としての拡充期、戦時期、新制大学への改編期、高度経済成長期、そして近年までの大学全体の歴史や、学生生活の変遷、戦前・戦後期の著名な学者の足跡をたどり、また構内の拡充が進んだ1939年ごろの本部構内を復元した模型、1930年代の学生生活を示す下宿の模型などで歴史の切片に触れられ



完成予想図(上・下とも)

るようになっていきます。さらに、将来的には展示スペースに設けられた映像ブースなどの機器で、より深く京都大学の歴史を知りたい方のためにCGなどの映像や様々な画像データを提供していくことなどを計画しています。そのほか、企画展を催すなど、より多くの方々に多面的に京都大学の歴史を認知していただけることを目指しています。

12月15日より公開される予定です。是非お越しください。

開催日時：月曜日(初日の12月15日を除く)と年末年始以外の毎日 9:30~17:00

入場無料

資料提供のお願い

大学文書館では、京都大学の歴史や学生生活などに関する資料を収集しています。

ご協力いただける場合は、下記までご連絡ください。

Tel: 075-753-2651

Fax: 075-753-2025

E-mail: archiv52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

京都大学と「開かれた大学」

——「夏期講演会」について——

京都大学大学文書館助手 嘉戸 一将

近年の大学改革は様々な理念や考え方を反映したもので、様々な方針・政策が掲げられている。こうした変革を表すスローガンの一つに「開かれた大学」という言葉があるが、周知のように、これは大学の国際交流や「社会との連携」の促進を意味する。例えば、今では頻繁に行われている公開講座や公開講演会は、大学の社会との関係を「開かれた」ものにすることを目的としており、それは現代の大学の課題の一つになっていると言っても良いだろう。しかし、公開講座や公開講演会によって大学を社会に対して「開く」という考え方自体は、必ずしも現代固有のものではない。

戦前の京都帝国大学では、「夏期講演会」（「夏期講習会」とも呼ばれていた）なるものが、1910(明治43)年から行われていた。これは学外者に対して「開かれた」講演会で、毎年8月に一週間から十日間にわたって(一コマ2時間、各講義4～8回)、全学的な講演会として催され、聴講者には「証明書」(写真)が授与された。その規則を定めた「京都帝国大学講演会会則」(『京都大学百年史』資料編二、183ページ、参照)の第1条には「本会ハ各種学科ノ知識ヲ普及スルヲ以テ目的トス」とある。要するに、大学による社会の啓蒙を理念とするものと言えるが、これは、当時の「大学拡張」、すなわちuniversity extensionをめぐる議論への京都帝国大学としての対応でもあると考えられる。「大学拡張」論は、イギリスやアメリカで市民に「開かれた」教育として行われていた公開講座や夏期講習会、通信講座などを紹介し、それらを通じて高等教育の機会の拡大、さらには社会主義を背景とした労働者の教育環境の向上を、日本でも実現しようとしたものだった。そうした議論が明治末から大正期にかけて盛んに行われるようになり、京都帝国大学は比較的早い時期にこれに対応したと言える。例えば、京都帝国大学における夏期講演会の開始は、当時、「最高学府」としていち早く「総長以下、教授挙りて講習に努めん」としているとして好意的に評価されている(「夏期講習に就て東大に望む」『教育時論』第907号、1910年6月25日)。

京都大学にはこの夏期講演会関係の行政文書が、1910(明治43)年から1939(昭和14)年までのものについて保存されている(『夏期講演



夏期講演会関係書類(大学文書館所蔵)

会関係書類』および『夏期講習会関係書類』)。それらには、時間割や、各講義のテーマと担当する教員(各学部から数人ずつ担当している)、講義ごとの聴講者の出席簿、講義ごとの聴講者数などの統計、ポスター、様々な新聞や雑誌等に広告を出していたことを示す記録、さらには遠方からの聴講者のための近辺の宿泊所に関する情報などが綴じられている。『評議会議事録』によると、その後夏期講演会は、1938(昭和13)年には廃止するとされた(同年の講演会については暫定的に中止とされた)が、1939(昭和14)年には「歴史アル講習会ヲ廃スルハ遺憾ナリ」とする見地から継続されることになった。しかし、同年には理学部・経済学部・農学部しか行っておらず、翌1940(昭和15)年には全学的に行うことについて賛同が得られず中止になっている。市民はこれをどのように見ていたのだろうか。中止になった1938年の『夏期講習会関係書類』には、1910年の第1回から毎年聴講していたという熱心な聴講者からの書簡が綴じられている。それによると、夏期講演会が「社会文化に貢献せられたる実跡甚大」であるとされ、その継続が望まれている。これに対し、大学側は聴講者の減少のため、開催が困難であることを書き送っている。

「大学拡張」論に謳われたような理想をどこまで反映していたのかはともかく、戦前の夏期講演会は、啓蒙による近代化という使命や、社会階層間の不均衡の是正などといった明確な政治的理念を背景に行われるようになった。しかし、社会情勢の変化とともに理念はたやすく忘却され、「開く」ための原動力が失われていったのである。